

〔書評と紹介〕

小玉美意子・人間文化研究会編

『美女のイメージ』

児島恭子

美しい女という存在ほど人間の歴史に彩りを添えたものはないだろう。といったら、俗っぽいといわれるかもしれない。その「人間の歴史」は男の視点で語られてきたから、世の人々に美女という存在が何かしら毒をもつて意味ありげにとりあげられるのだろうか。しかし、人間が美を認識する生物ならば、原始以来、美しいとされる女は常にいたはずである。「美女」は、社会との関係以前に文化として存在する。そこで、まずその美のありようが人々の関心の的になるのであり、男に限らず、どんなふうなのが美女なのか興味をもたない人は少ないだろう。『美女のイメージ』と題されたこの本を見て、手に取る人は多いはずである。

この本は、お茶の水女子大学大学院博士課程在籍経験者有志のグループ、人間文化研究会のうち8名の論考から成っており、古代から現代まで時代順に並んでいる。

巻頭に執筆者らによる座談会が収録されており、同研究会の前書（『女性と文化3』JCA出版）から十年間の執筆者それぞれの研究への思いと今回の論考の動機などが語られている。研究会自体とその会員の、研究者としての私的な部分を表に出したというところであろうか。

女性研究者としての歩みを語った部分は、女性読者には共感する所も多からうし、問題意識は、ある程度女性としての経験を重ねるうちに熟成されるものなのかという納得もあつたりしておもしろい。ただ、このような前置きがあることはいいことなのか、女性史関連の著作においては自らを語ることが、一種の啓蒙となり主張となるひとつの表現ではあるが、賛否の分かれるところではないだろうか。

内容を、以下に掲げる。

- 1 岩崎和子「しなやかに動く美女―古代日本の美女のイメージ」
- 2 梅村恵子「清らに輝く姫君たち」
- 3 今関敏子「色好み」の女―伊勢物語から建礼門院右京大夫集へ―
- 4 奥山けい子「能にみる美女の古い―卒塔婆小町」
- 5 浅倉有子「国風の美」
- 6 沢山美果子「結婚の条件の近代」
- 7 藤岡美智子「野村梅子談笑録―さがけて大葉桜」
- 8 小玉美意子「現代の美女を作るテレビ」

1は、正倉院の鳥毛立女図屏風に描かれた美女と薬師寺の吉祥天とを題材にし、中国の美人観との比較を行い、文献からの検討も含めて日本古代の美人観を探るといふ、図像をもとにした美術史からの論考である。どちらも和製の絵であるが鳥毛立女は楊貴妃タイプの唐開元期の美女像そのままであったが、吉祥天は唐画の影響を強く受けているものの、日本的な美女観に影響された結果の変化をみせているという。それは、しなやかな強さをもった動きのある肉体を美しいとする美意識である。そのことは麻布菩薩（正倉院）や十一面観音像（法華寺）において、確固

として現れているとされている。

2は歴史学の立場から、歴史資料や文学作品などの文字資料をもとに八世紀から一一世紀における女性美の表現や意識、その時代的变化を考察されたものである。その時代の女性観の背景を押さえた女性史としての概説にもなっている。

3は王朝文化を支えた大きな要素である「色好み」が女においてどのように展開したかを述べる文学分野の論考である。色好みの精神は、和歌を制度化し公の世界のものとする、主流とはならない周縁の美意識で、色好みの女は伊勢物語を頂点としたのち、男性視点によって拒む女に驕慢な女とされ零落していくが、建礼門院右京大夫という女性の自己表現は色好みの精神の深まりであるとする建礼門院右京大夫集論である。

4は、絶世の美女、小野小町の老いの姿を、成熟しきった女の強さと弱さという視点で、能の卒塔婆小町にみる。音楽学専攻の著者による能楽の演技論でもある。

5は、近世における、お国による美意識の違いを検証し、一九世紀になつて経済発達をもたらした地域独自の価値観の共有に、美人観も含まれるとした。近世史、北方史専攻の著者であることから具体的な地域は越後、奥羽であり、北方史と女性史の連結をも意識されている。

6は近代教育思想史の著者が一九一〇―一九二〇年代（近代学歴社会成立期）の、結婚のモデルの形成とそれに対する女性の対応を明らかにしている。

7は、狂言師六世野村万蔵の妻梅子（一九〇六―一九九三）の生き方を、万蔵の次男万作に狂言の稽古を受けている学生だった著者が、本人

からの聴き取りをもとに記録し、対象となる人々が同時代であるゆえの制約のもとではあるが、評論している。

8は、マスコミが発達した社会において人々がもつ美女イメージがどのようなものであるかについて、マス・メディアの中心であるテレビが及ぼす影響を明らかにしている。

以上のような構成になっているが、一読して『美女のイメージ』という書名に抱く期待とズレを感じる章もある。書名からは、視覚的な美女、一般的な意味での美女と直接関わりある内容が想像されるからである。

「美女」はどう語られどのように描かれてきたか。社会が付与するイメージから、女性と社会との関係を読み解く。これは「はじめに」においてこの本の趣旨として説明されもし、本の帯に書かれている言葉だが、その「読み」方は読者に任されている。であれば、前提となる《美女》に対して「社会が付与するイメージ」については、各論文でそれぞれ十分に説明しておいてはしなかった。3は作品論という印象で、美女そのものとうつながっているのかわかりにくいし、4は老いに重点がおかれ、小町だから美女の老いにはちがいないが、老小町の高い精神性は理解できるが（しかし能の芸術上の表現の問題なのか一般的なもののか不明）美女ゆえの老いの過酷さとの関連が述べられていない。6は結婚相手の条件のうちの「みめ」にふれているが、主題は別にあり、美女論と結び付ける無理が感じられる。座談会のところで、論の立て方の経緯がのべられていてなるほどと思うが、その時代が求める美女像が結婚の条件に端的に現れるとはいえないだろう。

7において主人公はいわゆる美女であるわけではないが執筆者の意図

がはつきり書かれている。「美女のイメージ」論の構想の出発点で梅子を取りあげようとしたのは、梅子の「無名の」「主婦の」「生涯に、男の視野からは（おそらく）見えにくい女の誇りと意気ある生の選択を見ていたからである。・・中略・・われわれが「美女のイメージ」を顔かたちや年齢のみにこだわって考えていなかったことはいうまでもない。・・中略・・躍動し自在である女性美しい。「美女のイメージ」論の、すなわち好箇の対象であったのである。」これによって著者の意図は理解できる。ただ、それは「女性の生き方」という広野におかれるものであるから、美女のイメージという、独特のテーマには生かされない。

紙数が限られているが評者の関心によって1・2・5についてさらに述べておきたい。1は天平期の美女像であるが、とりあげられた図像がわずかで、はたして一般化できるのか疑問である。代表的な資料ということで足りるのなら、そのような型式化された図像は人々の生きた美意識そのままであるといえないのではないか。少なくとも、そのみが当時の社会の美女のイメージであるとはいえないのではないだろうか。2は摂関期の貴族女性について、美女論を女性史的に展開されており、この分野の現在における研究水準を示すものとなっている。ただ、清らという語を題に掲げた意味がわかりにくかった。清らの意味がいま一つ明確でなく、過渡期の女性を示すキイワードという位置づけになっているようにも受け取れなかった。5は、地域のありかたを国風の美意識という新しい視点でとらえようとしている。近世日本において地域の文化や女性の風俗についての美意識が多様に存在していたことはよくわかる

が、そもそも文化と美意識との関係性が不明なため、著者自身が「おわりに」で美の認識は文化構造等によって規定され、変化するものとされながら、たとえば眉剃りの受容・拒否の理由が単に美意識の問題ではなく、文化のありかたに係わるものと考えべきことが曖昧となっている。現代の我々は、古風な美女、現代的な美女、野性的な美女、知性的な美女というように美の許容範囲を広く捉えている。社会全体からすれば価値観の多様化という歴史的現象ということなのかもしれないが、個々の人間も理屈として多様な美を理解できる。好みはまた別である。人は、社会に規定された美女の基準を知りつつもそれとは違う自分だけの美女のイメージをもつこともある。根本にある美女観は広いものであり、時代による視覚的な美女像の変化はその中の一タイプの流行ということではないのだろうか。それでは非歴史的だ、ということにはならない。

しかし、それぞれの論考は内容が非常に充実しており、時代や分野の異なるものだけに全体が豊かな読みごたえのある一冊となっている。

『美女のイメージ』としてさらに特色のある、テーマに収斂した本になる余地は残されているようにみうけられたということである。全編を通して、自分らしく生きた女はすべて美女であるという読者へのメッセージを受けとることができる。

（四六版 世界思想社 一九九六年二月刊 定価二二〇〇円）

（こじま・きょうこ 昭和女子大学）